

水稻新品種「ヒノクニオトメ」について

¹⁾八木忠之・²⁾西山 壽・滝田 正・³⁾日高秀光・⁴⁾轟 篤・⁵⁾小八重雅裕
⁶⁾愛甲一郎・⁷⁾吉田浩一・⁷⁾齋田豊和・荒砂英人・⁸⁾黒木雄幸・川口 満
 (宮崎県総合農業試験場・¹⁾九州農業試験場・²⁾福岡県農業総合試験場・³⁾宮崎県農蚕園芸課・⁴⁾宮崎県農業大学校
⁵⁾宮崎県農業経済課・⁶⁾宮崎県西都農改良普及所・⁷⁾宮崎県小林農業改良普及所・⁸⁾宮崎県日南農業改良普及所)
 Tadashi YAGI, Hisashi NISHIYAMA, Tadashi TAKITA, Hidemitsu HIDAKA, Atsushi TODOROKI,
 Masahiro KOBAE, Ichirou AIKOU, Kouichi YOSHIDA, Toyokazu SONODA, Hideto ARASUNA,
 Yukou KUROGI and Mitsuru KAWAGUCHI: A New Rice Cultivar "Hinokuniotome"

水稻新品種「ヒノクニオトメ」は、1993年から熊本県において奨励品種に採用され普及に移された。ここに本品種の育成経過並びに特性概要を報告し普及の参考に供したい。本品種の育成に関し、種々ご高配をいただいた関係県農業試験研究機関各位に深く謝意を表する。

1. 来歴及び育成経過

本品種は1981年宮崎県総合農業試験場(農林水産省水稻育種指定試験地)において、早生の良質、強稈、多収を目標に「南海82号」を母、「黄金晴」を父として交配を行い、世代促進、個体選抜、系統選抜を経て、1988年F₂より「南海109号」の系統名を付し、関係県に配布して地方適応性を検討してきたもので1993年7月「水稻農林325号」と登録、「ヒノクニオトメ」と命名された。

2. 特性の概要

1) 形態的特性: 「日本晴」と比較すると、稈長は同程度の中稈で、穂長も同程度、穂数はやや少ない偏穂重型である。止葉は短めで直立し、草姿は良い。ふ先色は黄白で、まれに短芒があり、粒着密度は中で、脱粒性は、難である。玄米の粒形・粒大は中で、外観品質は腹白が少なく良質で「日本晴」より優れる。搗精歩留まりは普通で、食味は「日本晴」より良い。

2) 生態的特性: 出穂期・成熟期は「日本晴」と同程度で、暖地では早生の晩に属する梗種である。耐倒伏性は「日本晴」より強いやや強で、収量は「日本晴」と同程度かやや少ない。

いもち病抵抗性遺伝子型はPi-aとPi-iをもつと推定され、葉いもち・穂いもち抵抗性はやや弱である。白葉枯病抵抗性品種群は金南風群に属し、圃場抵抗性はやや弱で、縞葉枯病には罹病性である。

3. 奨励品種採用理由

熊本県の中山間地・高冷地向けの早生種の「日本晴」は、近年の良食味志向の市場において評価がきびしく、作付は減少している。かわって極早生で食味評価の高い「コシヒカリ」、「ミネアサヒ」が増加し、特に高冷地では面積の8割を占めている。この2品種は熟期がほぼ同じで収穫時期の競合が問題になっており、熟期分散のため、「日本晴」と同程度の熟期で、良質で良食味の品種が求められていた。

「ヒノクニオトメ」は「日本晴」と出穂期・成熟期がほぼ同じで、品質と食味が優れるため、これらの地帯の産米改良を図ることができる。

以上のことから、中山間・高冷地向け早生種として、「日本晴」の一部、「ミネアサヒ」及び「日本晴」と同熟期の「黄金晴」の全部に替えて約1,500haほどの作付が見込まれる。

4. 栽培上の注意

- 1) いもち病にはやや弱いので、常発地での栽培は避けるとともに、その他の地域に当たっても適期防除に留意する。
- 2) 白葉枯病にやや弱いので適期防除に留意する。
- 3) 良質米生産を図るため適期収穫に留意する。

第1表 ヒノクニオトメの特性概要

形 質	ヒノクニオトメ	日 本 晴
早 晩 生 草 型	早生の晩 偏 穂 重	早生の晩 偏 穂 数
出穂期(月日)	8. 21	8. 20
成熟期(月日)	9. 26	9. 25
稈 長(cm)	79	78
穂 長(cm)	20.2	20.4
穂 数(本/㎡)	374	398
芒の多少・長短 ふ 先 色	稀 短 黄 白	稀 短 黄 白
脱 粒 性	難	難
耐 倒 伏 性	や や 強	や や 弱
葉 い も ち	や や 弱	中
穂 い も ち	や や 弱	中
白 葉 枯 病	や や 弱	中
縞 葉 枯 病	罹 病 性	罹 病 性
玄米重(kg/a)	44.7	45.9
同上標準比率(%)	97	100
玄米千粒重(g)	22.4	22.8
玄 米 品 質	上 下	中 中
食 味	上 下	中 上

注) 育成地における1985~1992年の標準栽培